

第4回地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会

平成30年11月16日（金）
午前9時30分から11時まで
別館8階第一会議室ABC

次 第

1 開会

(1) 知事挨拶

2 議事

(1) 意見交換

社会総がかりで取り組む教育の実現

(2) その他

3 閉会

<配布資料>

資料1 社会総がかりで取り組む教育の実現に関する論点

資料2 第3回地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会の意見

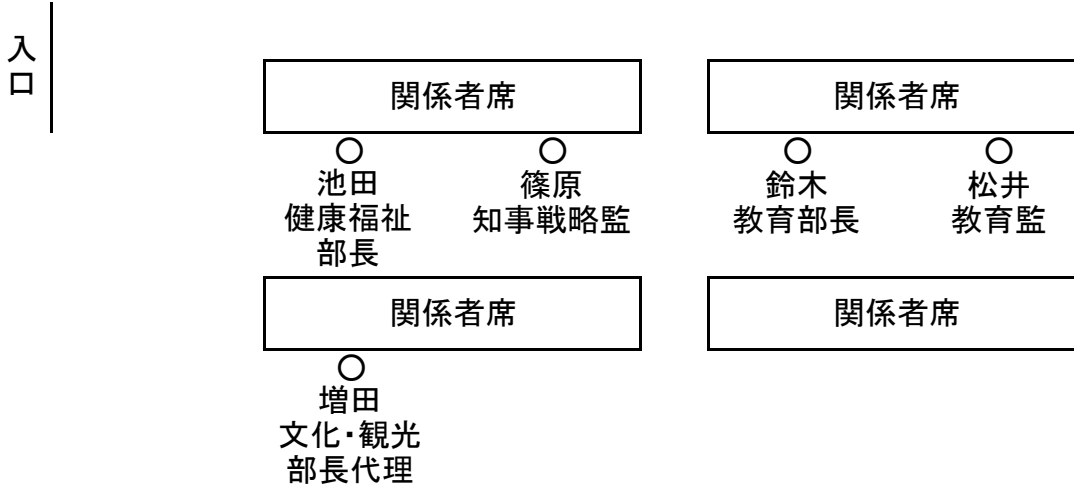
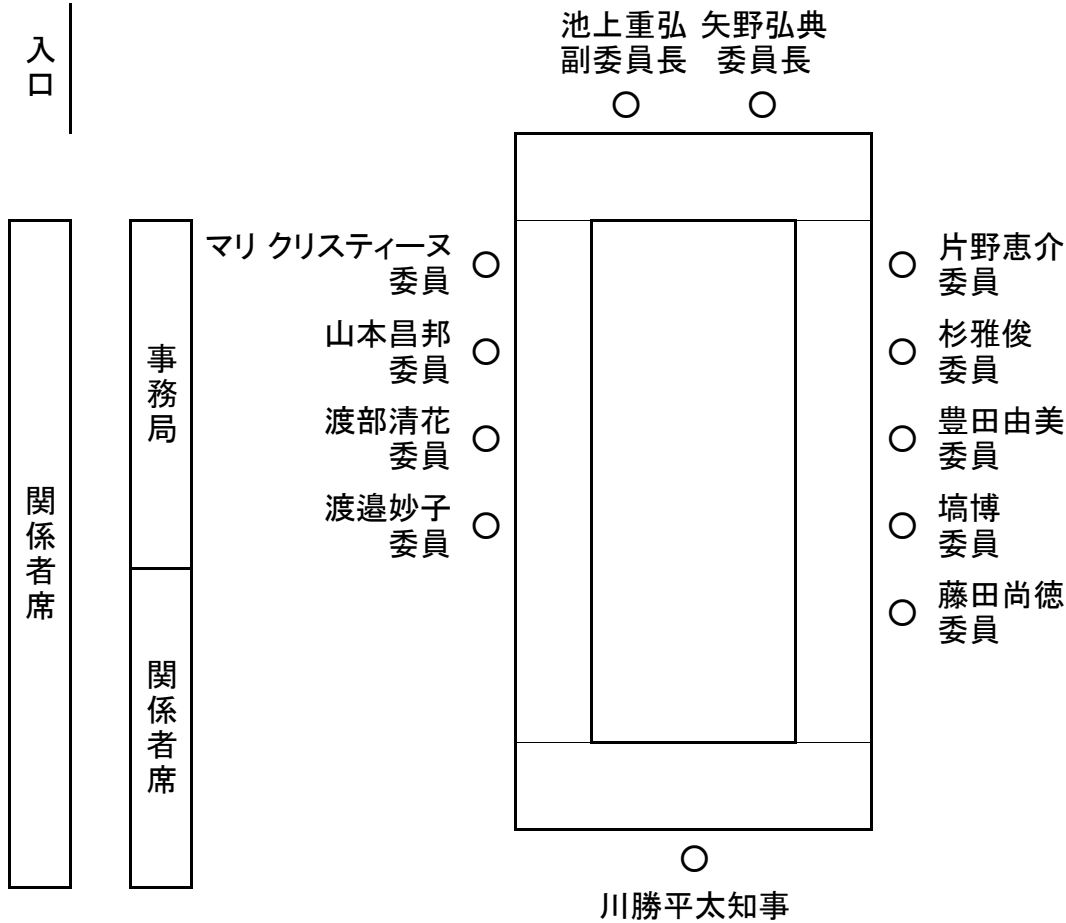
別冊資料 ・ 第3回・第4回実践委員会参考資料

- ・ 教員勤務実態調査（概要）
- ・ 未来の学校「夢」プロジェクト平成29年度までの取組のまとめ
- ・ ふじのくに魅力ある学校づくり推進計画
- ・ 静岡県立特別支援学校施設整備基本計画（概要）
- ・ 小学校学習指導要領（道徳）
- ・ 中学校学習指導要領（道徳）
- ・ 第2次静岡県消費者教育推進計画（概要）

第4回地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会 座席表

日時 平成30年11月16日(金)午前9時30分～

場所 別館8階第一会議室ABC



地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会委員一覧

(委員長、以下 50 音順、敬称略)

氏 名	役 職
やの ひろのり 矢野 弘典 (委員長)	(一社) ふじのくにづくり支援センター理事長
いけがみ しげひろ 池上 重弘	静岡文化芸術大学副学長
かたの けいすけ 片野 恵介	青年農業士
かとう あきこ 加藤 暁子	日本の次世代リーダー養成塾専務理事、事務局長
きよみや かつゆき 清宮 克幸	ラグビートップリーグヤマハ発動機ジュビロ監督
しらい ちあき 白井 千晶	静岡大学人文社会科学部教授
すぎ まさとし 杉 雅俊	静岡産業大学総合研究所参与
たけはら いずみ 竹原 和泉	横浜市立東山田中学校ブロック学校運営協議会会長
とよだ ゆみ 豊田 由美	ちやの ^き 生代表
なかみち いくよ 仲道 郁代	ピアニスト、桐朋学園大学音楽学部教授
ばん ひろし 埴 博	藤枝明誠中学校・高等学校校長
ふじた ひさのり 藤田 尚徳	株式会社なすび専務取締役
マリ クリスティーヌ	異文化コミュニケーター
みやぎ さとし 宮城 聡	(公財) 静岡県舞台芸術センター芸術総監督
やぶた てるあき 藪田 晃彰	日光水産株式会社代表取締役社長
やまもと まさくに 山本 昌邦	(一財) 静岡県サッカー協会副会長
わたなべ さやか 渡部 清花	東京大学大学院総合文化研究科修士課程
わたなべ たえこ 渡邊 妙子	(公財) 佐野美術館館長

社会総がかりで取り組む教育の実現に関する論点

子供たちの教育は、学校の先生だけに任せるのではなく、「地域の子供は地域の大人が育てる」という決意の下、取り組むことが重要である。

特に学校においては、社会の変化に柔軟に対応し、地域住民や保護者からの理解と参画を得ながら、子供たちの学びを支える地域に根ざした学校づくりを推進することが必要である。

また、自らの能力を最大限に伸ばす機会は、等しく与えられるべきであり、個々のニーズに応じた教育の充実等、夢や希望を持って社会の担い手となる教育を推進することが必要である。

これらの取組により、「才徳兼備」の人材を育む教育を社会総がかりで推進していく必要がある。

論点 1：学びを支える地域に根ざした学校づくりの推進

多様化する児童生徒の実態や社会の実情・ニーズに柔軟に対応した地域に根ざした魅力ある学校づくりを進めるために、具体的にどのような取組が考えられるか。

【検討の視点】

- ・ 地域学校協働本部やコミュニティスクール等、地域と学校の連携・協働の推進
- ・ 教職員と子供が向き合う時間の拡充
- ・ 地域の実情等を踏まえた魅力ある高等学校の実現

論点 2：誰もが夢と希望を持ち社会の担い手となる教育の推進

全ての人々が生まれ育った環境や経済的理由に左右されず、自らが持つ能力・可能性を最大限に伸ばし、夢や希望を持って社会の担い手となれる教育を推進するために、具体的にどのような取組が考えられるか。

【検討の視点】

- ・ 障害のある人、外国人等を始めとするマイノリティとの共生意識の醸成及びいじめ、貧困等に対する相談支援体制の構築
- ・ 特別支援教育の充実（障害のある児童・生徒一人一人のニーズに対応した指導と切れ目ない支援体制の構築）
- ・ 道徳教育を始めとする豊かな情操を育む教育の推進
- ・ 社会参画に向けた教育・支援の充実（消費者教育など）

論点 1：学びを支える地域に根ざした学校づくりの推進

地域学校協働本部やコミュニティスクールの導入等に関する意見

- ニーズのないことを学校が行うことにならないよう学校運営協議会が「Plan」、地域学校協働本部が「Do」の関係で、両者が常に協議をして実行していくサイクルをつくる必要がある。（竹原委員）
- 地域学校協働本部の設置やコミュニティスクール等の制度は、これまであった地域全体で人をつくるという文化を仕組みにしたことであり、制度化することで、継続性を高めることである。（竹原委員）
- 制度として導入すると学校側の負担が増すように思われるが、役割を分担してコーディネーターが機能していくと、みんなで協議した結論を実行していくので、むしろ学校側の負担感が減る。（竹原委員）
- これらの制度をさらに推進する上で、学校教育と社会教育、学校教育と福祉部門など、行政の縦割りを繋ぐような仕組み、学校のマネジメントに合った動きができるような委員の選定が課題である。（竹原委員）
- 私学は地域と学校に垣根がある。そのため、学校行事の中に地域を取り込むだけではなく、地域清掃や祭りなど地域の行事に学校が積極的に出かけて交流を行う。人間関係を学んだり、築き上げたりするには、地域の活動に積極的に参加し、交流することが大切ではないか。（埴委員）

地域の実情を踏まえた魅力ある高等学校の実現に関する意見

- スポーツ学科を設置するに当たっては、静岡県は広いので、自宅通学とした場合、トレーニングと栄養、休養面における親の関わり方の観点から、県内の地域バランスが重要である。また、スポーツ科と体育科ではかなり印象が違ってくるので、しっかり検討した上で、世界レベルの施設を揃えて17歳で世界やプロで活躍できる子供を輩出できる静岡県独自のものをつくってはどうか。（山本委員）

専門知識等を有する人材の学校教育での活用拡大に関する意見

- 子供たちに多様な学びの機会を提供する視点から、学校側のニーズを掘り起こす取組を進めてもよいのではないか。また、学校側の負担軽減のため、地域コーディネーターと連携して地域の人材を探し、繋がりを持つことで、子供たちにより実りある学びの機会をつくっていけないのではないか。（池上副委員長）

- コーディネーターの役割として、外部の方々が教育に関わる際、その人のスキルや経験値、学校のニーズに合わせる以外に、子供の年齢やレベルを理解しながら教えられるよう研修を行う必要があるのではないかと。また、教師のパートナーとして協働的に教育に関わるマインドも気にしながら進めていくとよいのではないかと。(竹原委員)
- (公財)産業雇用安定センターにキャリア人材バンクがある。生徒に技術を教えることは想定されていないが、外部人材として活用できるようにすれば、工業高校等の学校現場の需要に応えられるのではないかと。(杉委員)

スポーツ人材バンクの充実に関する意見

- より多くの人材に登録及び活躍してもらうため、人材バンクに登録するメリットや既に活躍している指導者のロールモデル、好事例をホームページやパンフレット等で示すなど、制度の周知に取り組む必要があるのではないかと。(池上副委員長)
- 指導者を登録する際の基準が厳し過ぎるのではないかとこの意見があった。そうした視点からも登録者数を増やすための方法を考えていく必要があるのではないかと。(矢野委員長)
- スポーツでは、中学期(13~15歳)で子供たちの能力を引き出していく指導が重要であるが、必ずしも中学校に専門性のある指導者がいないため、指導者を養成していく特別なサポートが必要である。(山本委員)
- サッカー指導者のライセンス制度のように、教師も段階的に成長してもらう必要がある。子供の能力を最大限に引き出せる指導者がよい指導者という観点から、豊富な知識があっても子供たちに伝えられなければ意味がないということを、指導者養成の中でよく勉強してもらう必要がある。(山本委員)

静岡型ホストファミリー制度の構築に関する意見

- 買い物や食事などの交流を切り口に、ホームステイに対するハードルを低くし、より多くの県民が外国人と触れ合う機会をつくるため、外国人留学生等の受け入れることが可能な家庭の登録制度を考えてみてはどうか。(池上副委員長)
- 最近、特にアジア各国から日本へ農業・工業・芸術など様々な分野で留学希望が多いが、本県には多岐に渡って特色のある学校がたくさんある。留学生の受入には必ずしも国際化した特別な環境を必要としない。(加藤委員)
- 意識の高い留学生が一人でも学校の中に入ると化学反応を起こし、日本人生徒は影響を受けて変わっていくので、留学生を受け入れた方がメリットは大きい。例えば1市、1町、1家庭ずつ毎年受け入れていくような制度や仕組みがあればさらに国際化して行くのではないかと。(加藤委員)

論点2：誰もが夢と希望を持ち社会の担い手となる教育の推進

マイノリティとの共生意識の醸成に関する意見

- 最近、人間関係を構築できない子供が増えている。生徒指導上の問題が起きた場合、生徒個々の情報の共有は非常に大切である。(埴委員)
- 障害のある子供と健常者の子供の関わり方について、小さい頃からハンディキャップをどう捉えるかを学ばせることが大切である。例えば、小学校低学年で特別支援学校の子供たちと農業体験や運動会など、お互いの個性を認め合えるような場をつくることで、大人になっても違和感なく接することができるようになる。障害を個性として受け入れる寛容な心を醸成する教育環境をつくることが大切ではないか。(片野委員)

情操を育む教育の推進に関する意見

- 美術教育でいうと、日本は学問的で堅苦しい授業が多い。本来は感性の教育である。それぞれの年代で感性は違い、それぞれ素晴らしい感性を持っている。美術教育も個々の感性に基づいた一つの形を開発していかなければ難しい。展覧会の解説も個々の感性を引き出す言葉の使い方など、新しいやり方が必要であると感じる。(渡邊委員)
- 芸術は、自分が作品をつくる側にいなくても人生を楽しむために役に立つ。また、お金がなくても人生を楽しくするための方法として文化はある。芸術に限らずあらゆる文化にアクセスできる機会を平等に整えるべきではないか。(宮城委員)

「読書の時間」における音読等の充実に関する意見

- 読書は人生観や世界観を広げることができるので、「読書の時間」の中で、音読や朗読を選択肢として取り入れてはどうか。(池上副委員長)